

位置と環境

大口市新平田遺跡は、鹿児島県の北部内陸の大口盆地を中心とする大口市の西側、川内川の支流のひとつである平泉川の標高208mの右岸に立地する。周辺には平泉城跡、王城古墓、淵辺城跡、馬場A遺跡などの中世の遺跡が分布し、遺跡の南側を水俣方面に抜ける旧道が通っている。

調査の経緯

新平田遺跡の発掘調査は、大口市教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力で実施した。担い手育成基盤整備事業（平出水地区）に伴うもので、確認調査を平成6年11月に行った。確認調査は13本のトレンチを設定し、必要に応じて拡張しながら行った。

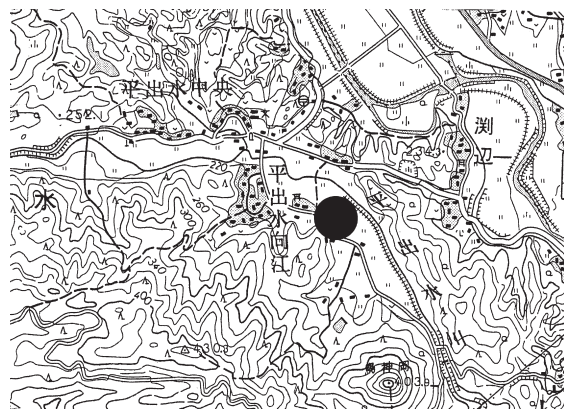
確認調査の結果、中世の掘立柱建物跡を中心とする遺構が検出され、水田の床土直下に遺構面が検出されることがわかった。遺構面までが浅いことと、次年度の水田耕作に間に合わせるため既に事業が発注されており、設計変更や盛土工法等の現状保存も検討したが、水掛かりや排水の関係などあり、不可能であった。

このため確認調査に引き続いて全面調査に移行することとなった。11月28日から12月26日で約3,500㎡の全面調査を実施した。なお遺構面の下層は平出水川の氾濫により堆積したと思われるシラス・砂・砂礫層であった。

遺構と遺物

遺構は、第1地点では、32棟の掘立柱建物跡と方形の竪穴建物跡7基が検出され、1,525個前後の柱穴が検出された（第2図）。第2地点では、溝状遺構4条と掘立柱建物跡が2棟検出された。

本遺跡出土の遺物は、青磁・白磁・土師器・黒色土器・須恵器系陶器・瓦器・陶器・滑石製石鍋・鉄釘・馬具が出土した。青磁は龍泉窯系碗・杯を主体に同安窯系碗や口剥げの白磁が出土した。また四耳壺や磁州窯系の白釉鉄絵壺、双魚文の貼り付け青磁なども出土している。



第1図 新平田遺跡の位置

中世須恵器については、熊本県荒尾市の樺万丈窯のものと考えられる壺・甕と、東播系の捏鉢、常滑焼の大甕が出土した。また、西彼半島を原産地とする滑石製石鍋が出土している。

遺跡の時期については、各遺物の編年を総括した結果、土器類の編年（第4図）に基づいて3期に分けられる。12世紀の後半から13世紀代をとおして、継続的に経営された施設であろう。1期から3期について、いずれの時期も中央部の掘立柱建物群と北東部の平地式の建物跡、それに方形竪穴建物跡の組み合わせからなる施設である。2期の13世紀の前半期に最も建物数が多い。

検出された方形竪穴建物跡は、2本の支柱を長軸方向にもち、第3図の1号竪穴建物跡のように壁に沿って小さな柱穴痕が並ぶものと、6号竪穴建物跡のように壁際には検出されなかったものがある。いずれも炭化物がほぼ中央に堆積しており、床面は硬化面が見られず、床面からの遺物はほとんど検出されない。埋土の状況からは短期間に人為的に埋めもどされた可能性が強いものである。出入り口と考えられる張り出しは、2本柱の支柱と同一軸方向にある。これらの3種類の施設は機能別に存在したものと考えられる。

特徴

遺物は中国製磁器・国産陶器など当時の広い流通圏を反映している。竪穴建物跡については、中世都市鎌倉では、都市の周縁部に立地し、川や道路、船着き場、海岸といった「無縁」の場に集まる傾向が強いとされ、全国的にも内陸部の河川や街道沿いに

多く検出されている。鎌倉幕府の御家人の地頭職補任との関係も指摘されている。本遺跡は河川沿いの旧道沿いに立地し、馬具も出土しており、御家人の牛屎氏や島津氏や相良氏などの支配が相克した地であり、全国的に見られる竪穴建物跡と同じ性格の遺構として捉えられる。この発掘調査後に南九州でも竪穴建物跡の検出例が増えている。鎌倉幕府や北条徳宗家の支配に伴う年貢の徴収や収納など、全国的な流通網の整備と御家人の下向・配置との関連から「鎌倉」の経済的な支配を現れとする考えもある。

機能としては、工房や倉庫が考えられている。こうした遺構を集成することで、中世前期の流通路や社会体制の復元への重要な手掛かりとなる可能性がある。

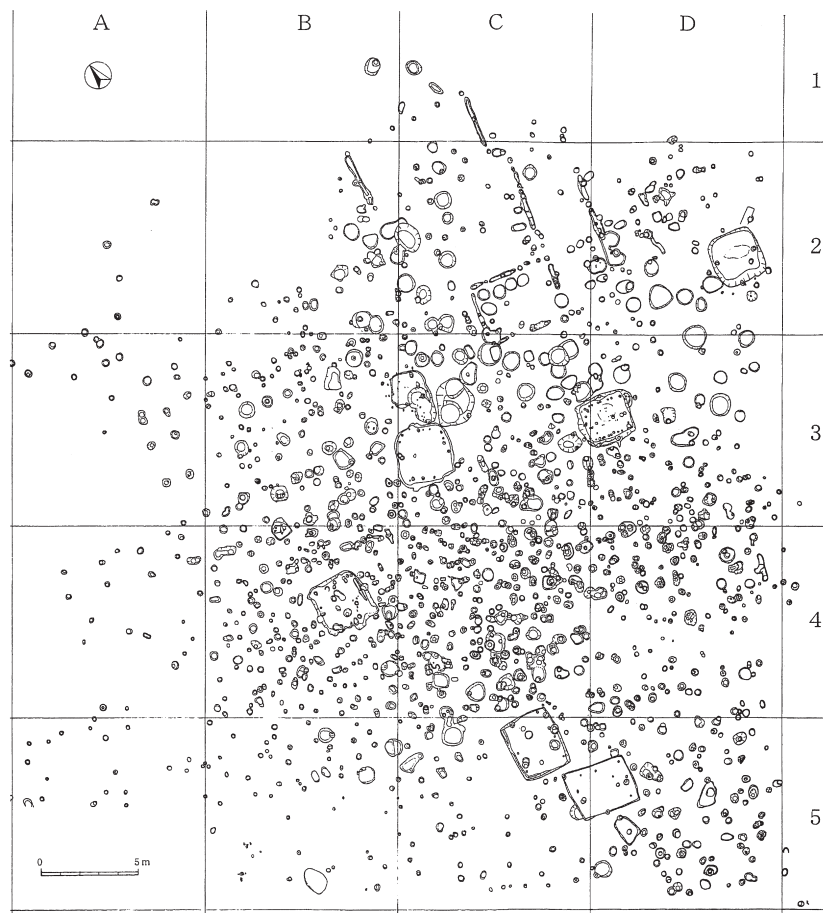
資料の所在

出土遺物は、大口市教育委員会に保管されている。

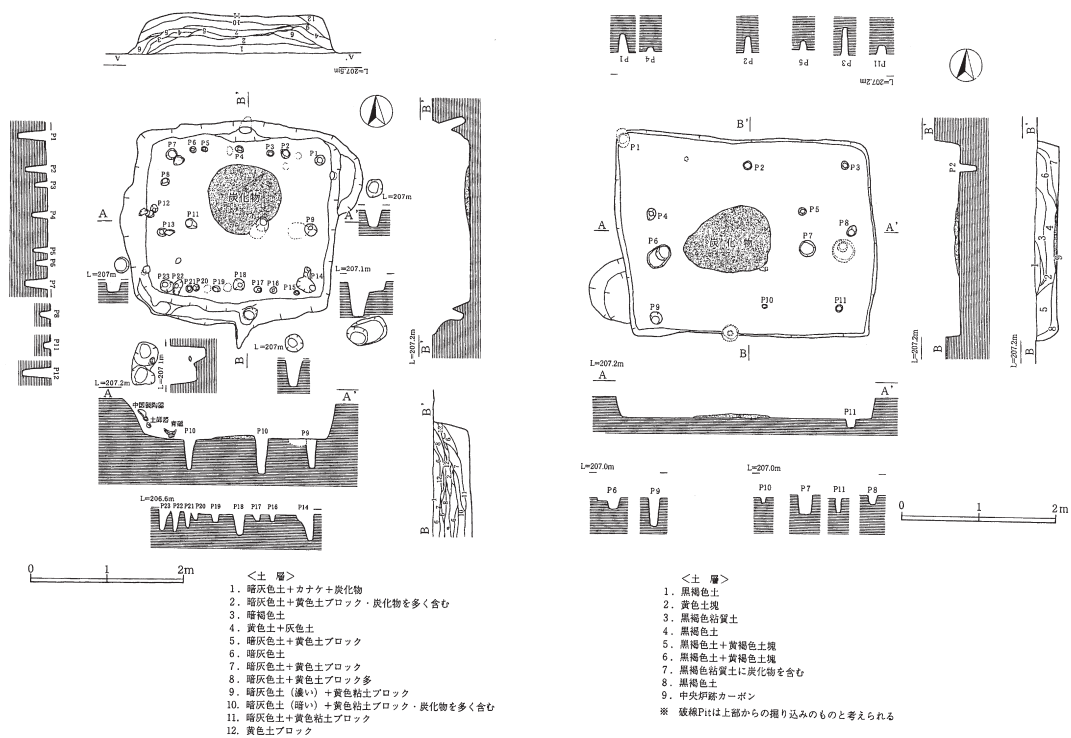
参考文献

大口市教育委員会1997「新平田遺跡 辻町B遺跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』20

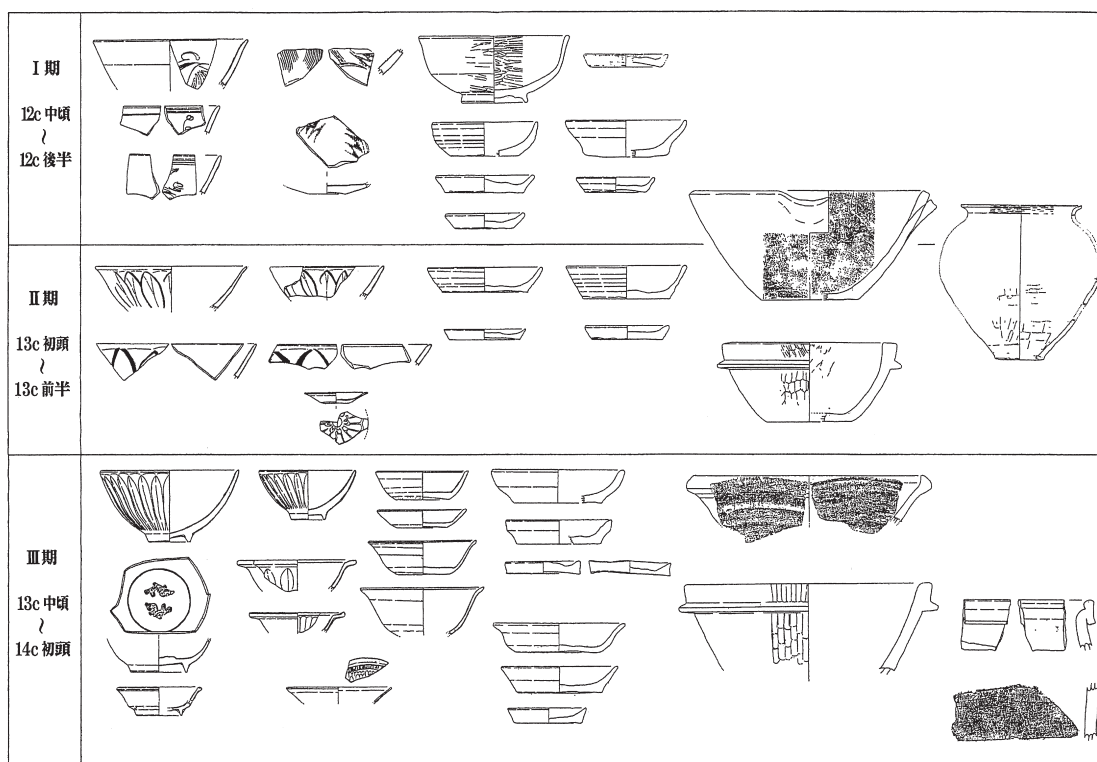
(堂込秀人)



第2図 新平田遺跡遺構配置図



第3図 中世竪穴建物跡



第4図 出土遺物編年図